

國學院雜誌第拾壹卷第貳

通卷第百貳拾四 (禁轉載)

明治三十八年二月十日發行

論 說

論

太田全齋傳

文學士 龜 田 次 郎

はしがき

說

我國語學界は月に日に駸々と進歩し近來大に隆盛を極めたる結果諸種の方面に多くの新研究起りて從來語學者としては必ず記憶せらるべき人にてありながら其傳記の逸して殆んど傳はらざりし者も近時諸種の誌上にこれが詳傳の掲載せられたる者また少からずこれ實に慶ぶべき事なり然るに獨この全齋の詳傳に至りては今日もなほこれを世に出せるものを見ずこの人は韓非子翼義漢吳音圖の著者として夙に世に知られ其の漢學者としてもまた我邦に於ける韻鏡學者としても決して忘るべからざる人なり斯くの如き有名の學者なるにかゝはらず其の

(三九)

(二)
詳傳を逸したるは誠に遺憾の事ならずや昨夏世に刊行せられたる國學者傳記集成は從來斯道の學者の傳記に關するものを廣く諸書に涉獵して最も能く網羅せりといへどもこの全齋の傳に至りては只僅に古學小傳續近代名家著述目錄に見えたるものを載せたるに過ぎず惜むべき事にこそ予數年來諸書を繙讀せる傍荷くもこの人に關する事跡の見えたるものあらば悉くこれを抄寫し又他の知友より聞知せるとは皆これを手記し以て他日傳記編述の資料となしたりき今この資料によりて左に其の傳記を敘述せんとす尤もこの稿の不完全なる點あるは予自らも能くこれを知れりされど多少の苦心を経て編述したる者なれば其の從來世に存せる者に比して少しく詳細なる所あらん又この稿從來逸して傳はらざりしこの人の事跡の暗黒裡に一點の光明を與へたる者あらん後の學者更に研究の功を積みこの不備を補ひて他日詳傳を大成せられんとを偏に望むものなりこれ當に予一人の希望に止まらんやまた斯學界の爲めにも大に熱望する所なり予のこの稿聊世の研究者が後日の大成に資する者あらば満足するなり終に臨みていふべき事あり其は他にあらず予は今爰にこの人の學術上の地位及び其の學說の批評をなす者にあらで只單に其の傳記を敘述するに止まり其の敘述も一々其所載書目を各事項の下に列記して出典を示し以て參看に便にせることなり讀者乞ふこれを諒せしめよ

參考資料

今この傳記を述ぶるに先ちその參考資料となるべき者の中主要なる者を示さん
男信の跋文

古學小傳下二十二枚表

續近代名家著述目錄四

芝林松院過去帳(現今天光院所藏)

全齋讀例寫本の奥書

跋全齋讀例の序文

日本教育史料四 福山藩の條二六四頁

慶長以來諸家著述目錄漢學家之部上、一七〇頁

國學三遷史二五五頁

慶長以來國學家略傳三五六頁

國語學書目解題五一七頁—五一九頁

國學者傳記集成九三〇頁—九三一頁

大矢透氏談話

天光院住職眞野觀堂氏談話

太田全齋傳

これなり
 以上は予が見聞したるものゝ中にて其の主要なる者のみを列挙せるなりされば
 なほこの資料として必要なるもの他に多く存し従うて遺漏多かるべし其は他日
 の補正を期せん

傳記

太田全齋は幼名を龜之助と稱し(古學小傳、國學者傳記集成、署)通稱を八郎と呼べり(古學小傳、林松院過)
 去帳、日本教育史料、諸家著述目録、國學三遷史、國學史、國學傳、國學集、國學序文、諸家著述目録、全齋は其の號なり(男信、古學小傳、林松院過)
 三遷史、國學史、國學傳、國學集、國學序文、諸家著述目録、全齋は其の號なり(男信、古學小傳、林松院過)
 去帳、日本教育史料、諸家著述目録、國學三遷史、國學史、國學傳、國學集、國學序文、諸家著述目録、全齋は其の號なり(男信、古學小傳、林松院過)
 著述目録、國學三遷史、國學史、國學傳、國學集、國學序文、諸家著述目録、全齋は其の號なり(男信、古學小傳、林松院過)
 國學者傳記集、日本教育史料に見えたるところによれば又名を經方と呼びたるが
 如し、然れどこは他の諸書に見えずして只この書にのみある事なれば一時これを
 用ゐたるものにて常には主として前者を稱したるならんと思はるゝなり備後福
 山の藩士なり(男信、古學小傳、林松院過、去帳、日本教育史料、諸家著述目録、國學三遷史、國學史、國學傳、國學集、國學序文、諸家著述目録、全齋は其の號なり)天明八年一七八八年
 藩主阿部正倫の代其藩の文學教授を命ぜられ後正精の代側用役勝手掛年寄とな
 れり(日本教育史料、古學小傳、用人より年寄格に進みし人なりと云とあるは蓋しこれを)
 指せるなるべし文政六年一八二三年正月廿七日致仕し(古學小傳、國學者傳記集成、署)これより後は
 専ら江戸に住みたりしが(男信、諸家著述目録、署)六年を経て同じ文政の十二年一八二九年六月
 十六日歿す(男信、諸家著述目録、署)命を功徳院道譽悟眞全齋居士といふ(林松院過、去帳)墓は芝公園地五號地十

番永平寺出張所内威徳院の墓所にありて先祖代々と合葬のものなり其の行年は
 幾歳なりしか詳かならねど七八十歳の間に死にたるが如し其は前に記したる
 天明八年に其の藩の文學教授となりし時より其の歿したる文政十二年までを通
 算するに四十二年の年月あり又次に示せる林松院の過去帳に據るに全齋が文學
 教授となりしと同じ年なる天明八年には其の男子の死にし事を記しありこれら
 によりて考ふるにこの天明八年には如何に若くとも彼は二十歳以上の年齢たり
 しは明かなり然れば今假に當時三十歳なりしとせば彼は七十一歳にて身まかり
 たることゝなるべしこゝを以て予は彼が七十歳以上八十歳以下にて歿したりと
 するの穩當なるを信するなり縦ひこの推測に誤ありとするも其は極めて僅少の
 年月にて殆んど眞に近き者なるは疑なからん

全齋の家系は如何なりしか今芝公園地内永平寺出張所内にある天光院に藏する
 過去帳の〔安政二卯一八五五年〕十二月現在檀中軒別戒名控二冊の内乾林松院と表
 題あるものに載せたる所によれば其は一家の人々の介名及び其歿年月日は次の
 如し(下に記せる過去帳の寫しは原文の儘なり年代の前後などおれどわざと原形を存したり讀者これを諒せよ)

備後福山藩

○太田藤七郎

秋光院隨譽貞意大姉天明二寅八月十三日
 藤藏妻

太田全齋傳

不退院安譽壽樂居士寛政十一未年正月廿三日
藤藏のこと

清山童子文化八未年十二月廿六日
藤七子

梅窓院香譽淨閑大姉文政元寅年十二月三十日
八郎妹

了覺院清譽淨心居士同人二年二月十五日
三の誤か三十日

貞樹院梅譽淨馨大姉同人妻
三の誤か三十日

清林院心巖芳樹居士同三辰年三月二日
八郎やつかい
（これは墓ありて側面に
「太田八十八」と記しあり）

西岸院現譽芳心居士同四巳年十月四日
八郎伴

功德院道譽悟眞全齋居士同十二年六月十六日
八郎こと

全齋は韓非子翼囊の著者なり

＊上華院還譽妙刹大姉嘉永元年十月廿三日
同年九月十九日
藤七妻

秋曉院仰譽西日大姉同年九月十九日
藤七妻

速悉淨體童子嘉永六丑年九月十日
藤七伴三藏の水子

威光院應譽眠覺居士同年十一月十一日
藤七郎こと

乘蓮笑玉童女安政二卯年七月十日
三藏娘

貞操院明譽智鏡大姉安政三辰七月七日
三藏妻

信岳院忠譽義哲居士天明元丑八月十八日
藤藏父

智法院信譽榮仁大姉寛政二戌十二月廿八日
藤藏母

清林院心巖芳樹居士(重出)

＊利笑卜女文久二戌八月二十七日
天明三卯二月二日
藤藏伴

春芳離幻童子天明三卯二月二日
藤藏伴

智雲卜子天明八申十月六日
八郎伴

如空卜女萬延二酉四月廿二日三藏死體出(女?)

香室淨閑大姉上に梅窓地か(重出)

＊香譽淨薫仲女天和二戌七月廿三日
五

＊然譽清廓仲女寶永西二月廿四日
五

＊一空了哲居士同七寅十月廿四日

＊智鏡院月山丁昌大姉享保四亥三月廿四日

＊養修院道阿德翁居士明和四亥十一月廿日

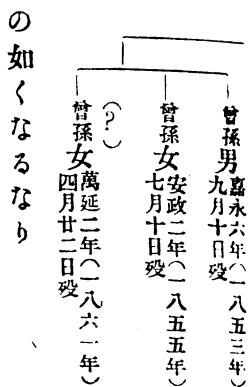
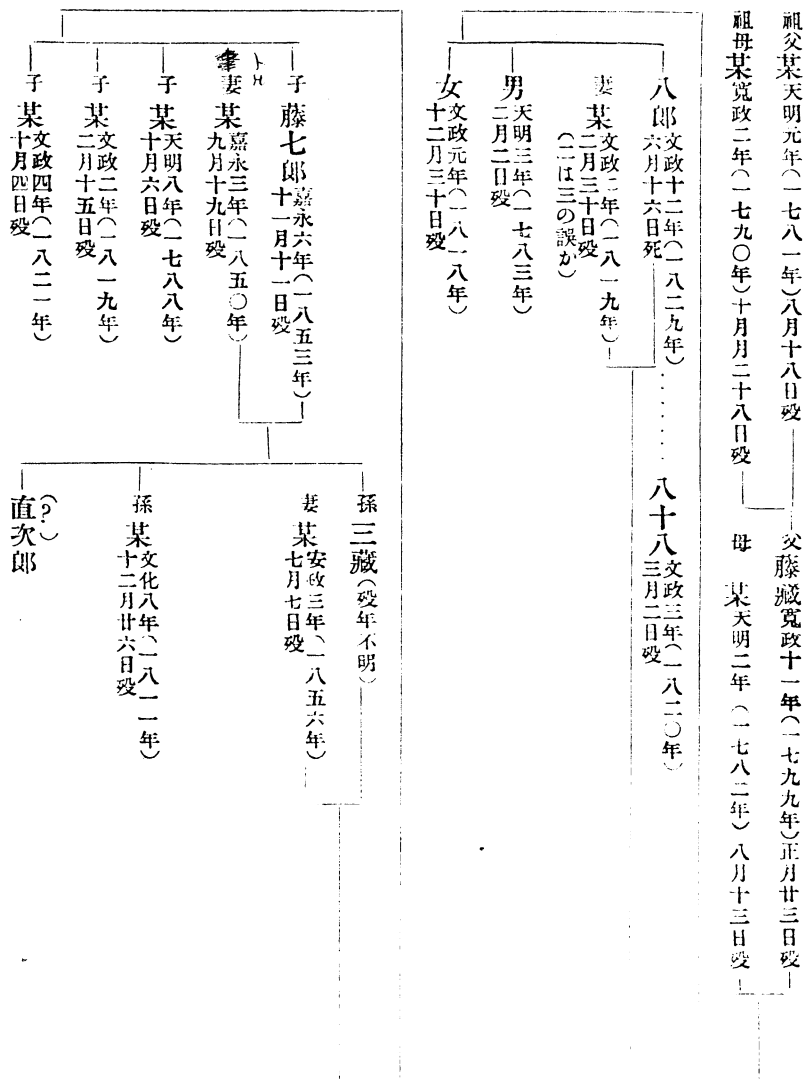
＊智照院惠一妙大姉延享四卯十二月四日

位牌有墓なし國許なるべし

これなり

これらの人々と威徳院に存する一家累代の墓碑を建てたる太田直次郎といふ人
とによりて其の家系を作らば

(八)



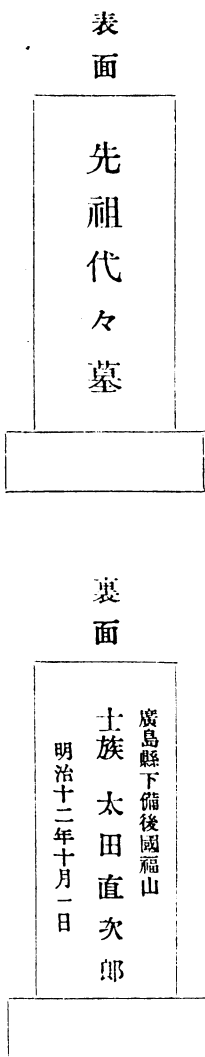
の如くなるなり

(過去帳にある中にて崇印を附したるものは關係不分明のものなればすべて右の系圖には省きて載せず)

これによりてみれば全齋の父祖及び子孫の系統は左の如くなるなり

某 藤藏 八郎 藤七郎 直次郎

此等の人々の墓は右の過去帳にも記したる如く國許に存せるものあらんも威徳院の墓地には只左圖のやうに



と刻める後年建てたる合葬のものあると芝公園地十六號二番小村圓常氏の裏手

太田全齋傳

(九)

にある墓地に前記過去帳の中「八郎のヤツカイ」と記したる清林院心巖芳樹居士太田八十八のもの外に一二子女の分あるに過ぎず

爰に序ながらいひおくべきはこの太田家の菩提所の寺院は初め林松院と威徳院となりしも後にこの寺の住職代はりまた廢寺となりたるより今は天光院にて管理することゝなれる事なりさればこの一家の過去帳もまた今は天光院に藏せらるゝなりこは傳記に餘り關係なき事なれど一言附け加へ置くなり

子孫は今何處に住めるか知る由なし歎すべき極ならずや予昨年五月中旬取調の爲めに天光院をおとづれたりし折にも住職眞野觀堂氏の語られるやう子孫和歌山奈良のあたりに巡查とやらん奉職してありと聞けど其のたよりだになく太田氏累代の墓も今は已に無縁となり居れり加之また小村圓常氏の裏手にある墓地も市區改正の爲め明六月限り取拂になる事となり居るものから豫め其の移轉の用意もあれば太田氏の舊藩井に其の郡役所へ宛てゝ子孫の所在を問合せたれど一向に行衛知れずとの回答ありたり又親戚も本郷區西片町にありて武田某といふといへどこれもまた定かならずといはれたりき

次にいふべきことは全齋の交友についてなり男信の跋文によるに全齋と東條義門との關係ありし事知らる其は跋文の中に

(上略)文政七年冬とみの事にて江戸に出けるに思の外の長居と成ぬるかかへり

ての幸にゆくりなう全齋太田方として備後福山人の音韻の學に賢きに遇しに因て即見せけるに己が考置る趣と大旨暗にと朴ちつゝ其自撰の漢吳音圖并に音圖口義など數々をも示し猶口説を惜まぬ情々しさ將いと懇也ければ爰はしば往ては得たる益のあるを件の稿本に書入などもしてもて歸りし後再治したるを(下略)

とあるより察すれば當時の韻鏡學者全齋と國語學者義門との間に學術研究上の談論ありし事想ひやらるゝなり又この全齋が義門との面談したる時は已に彼が晩年にして其死ぬる前六年の事なりこの折までは兩人共に其交りなかりしが如し

全齋はまた同じ時代に在りたる音韻學者黒川春村とも關係ありたるならんと思はるこれにつきては別に其の詳しき事を知るに由なしといへども東京帝國大學國語研究室所藏の全齋讀例の奥書に

右一條以太田全齋翁自筆稿本寫文政九載柔兆閏茂新秋日美成于好問堂北窓之下

文久二年十一月黒河氏藏本寫之

石橋 眞 國

とあるより考ふれば兩人の間に交際ありしならんか

この他全齋はまた韻鏡學者として有名なりし岡本保孝とも至りて親密なる交誼

を結びたり其は東京帝國大學國語研究室藏本駁全齋讀例の序文を見るに

安政四年丁巳九月廿九日友人木村埴麻呂(今ノ正辭博士)來訪シテ袖中ヨリ全齋讀例ト題シタル一小冊子ヲ出サレ是非イカニト云ハル手ニ取リテ見レバ亡友太田全齋翁ノ著述ナリ翁ニハ教ヲ受ケタル事モ少カラズソ、ロニ涙ノ浮ブヲ忍ビツ、アラアラ見モテユクニ此書ハ見タルコトコソ無ケレ大凡ノ説ハ昔日翁ノ語ラレシ事トモナリ彌々ナツカシク讀ミモテ行クニ此事度々人ニ語レドモ疑人ノミ有レバ書記置クヨシ有リ實ニ人ニ語レドモト有ル人ノ中ニ己レモコモリテゾ有リツラムト思ヘバ其カミ己ノ諾ハザリシヲイカニゾヤ翁ハカタフカレケムト今サラニナメケナリシ罪サリ所ナキコ、チセラル爾ハ有ドモ學ノ道ハオホヤケノモノニシアレバナタラカニ佳シトノミハ云ヒ難ク覺悟ノ事ドモヲ書付ケテ云ハムト思ヘハシバシ貸シタマヘトテ其書ヲ借置キタリ(下略)

況齋岡本保孝

とあれば明かなる事なり

大矢透氏の談話に故諸陵頭助西宮宣明翁が常に音韻の事は太田^{に精し}方なりと物語り居られしとありこの西宮翁は世人も知れる如く博學の士にして其の日記多く今に存し近年水戸藩史編纂に際しこれより有益なる史料を獲たりしといふさればこの日記を精細に調べなば必ず其の全齋との關係の如何なりしかは明かに知ら

いなんも今はその運に至り難きは甚だ憾みとする所なりこはとまれかくまれ兩者の間に交際ありし事は今更爰に詳言する迄もなきなり

尙この外當時に於て其の交友多かりしならんも予の見聞せる所は僅に以上述べたるものに過ぎず遺漏多きは固よりその所なるも今より尋ぬるに由なきを如何にせん

門人は如何なる人どもなりしかこれまた今知るに便なきは誠に遺憾に堪へざるなり只大矢透氏の談話によりて知る所あるのみ然れどこれだになは其の名を逸したるなり同氏の談話に

明治十一年頃京橋區館屋町の堀側に太田全齋直傳字音傳習といふ看板を掲げて音韻の學を教授せし者ありて字音表といふ著述をもなせりこの人今何處にあるかそのあとを知らずその名を何と呼びたりしか忘れて記憶に存せずと全齋は實に一代の韻鏡學者なりしかば必ず多くの門下生ありたらんは疑ふべくもあらず然るに今日毫もこれを知ること能はざる迄に成り果てたるはかへす

くも惜むべき事なり

全齋の著述につきては諸書により各詳粗ありて一定せず今男信、古學小傳、續近代名家著述目錄、^{以來}諸家著述目錄、國學三遷史、國學家略傳、國語學書目解題等の諸書に見えたるものを總括して次に之を列舉せん

漢吳音圖三 文化十二年五月自序刊 天保末再刻(黒川在村ノ説)

(一四)

漢吳音圖一

漢吳音圖說一

音徴不盡一、寫本、文政六年成

同策音圖一、寫本

音圖口義一、寫本文政六年ノ著音徴不盡ト同時カ

名實編一、

韓非子翼毳二一、

訂韓非子翼毳二六、

呂氏春秋折諸一〇、

墨子考要四、

古人諺叢三二、

三千字文三、

全重讀例一、寫本

全齋走筆八、

立教詳義 卷冊數不明

俚言集覽二六(三)

是なり

以上は右の諸書に見えたる者のみに係る尙この外に著述ありて漏れたるものあらんも知るべからず今爰には只知り得たるもののみを挙げたるなり
この著述の中最後に掲げたる俚言集覽は從來村田了阿の著として偏く世に知れ渡れる者なれど國語學書目解題五一七頁以下に中根肅治氏の説を引用せる所に從ひて今姑く疑を存し爰にこれを附記したるなりその中根氏の説にいはく

俚言集覽 二十六卷

此書題シテ俚言集覽ト云フ然モ載スル所悉ク俚言ノミニアラズ俚言ニモ雅言ニモアラザル種々ノ事項ヲ集メタルモノナリ只惜ム此書次約ヲ欠クモノ少ナカラズアノ部ノ如キム約已下全ク欠ク蓋缺本ナルベシ

此書何人ノ書入レシニヤ村田了阿編又ハ「移山紀」了阿揖チド記セリ輯又ハ「緝トスベキヲ揖トス笑フベシ而シテ本文中ニハ愚案「移山案又ハ「方按チドノ三案アリ愚案ト記スルモノ最多シ然ルニ此書ヲ村田了阿ノ著トナシ移山ハ即了阿ノ號トセンニ余ハ未ダ了阿ガ移山ト號セシコトヲ聞カズ了阿ハ一技堂又台麓春山ト號ス天保十三年歿ス且セノ部ニ專西寺一向山ト號ス駒込菓繩手ニアリ此寺移山ガ父母ノ墓所ナリ余モ亦壽藏碑ヲ立タリ云々トアレトモ

太田全齋傳

了阿ハ金杉西藏院ニ村田家代々ノ墓アリ了阿モ此寺ニ葬リアレバ移山ノ了阿ニアラザルコト明晰ナリ況ヤ凡例ニ親戚同僚云々ノ語アリ又書中往々一枝堂考證千典ヲ引用スルヲ見レバ了阿以后ノ士人ノ著ナル疑フ可カラズ考證千典ハ後人ガ了阿ノ考ヲ編シタルモノナリト云フ而シテ方按トアルハ何人ナラント著述目錄ニ據テ考ルニ太田方全齋ト號ス備後福山ノ人漢吳音圖、韓非子翼毳等ノ著アリ外ニ諺叢三十卷アリト載セタリ且僅言中福山ヲタリニテハ云々ト記スモノ頗ル多シ殊ニロノ部ノ初葉著者名ヲ記ス所ニ福山ト書シタル所アリ故ニ余ハ此書ノ著者ハ太田全齋ナリト斷定シ試ニ駒込鳳來町專西寺ニ詣リ太田方八郎ノ菩提所ナルヤ否ヲ尋ネシニ太田氏ト云フ者ノ墓ハナシトイヘリ然ラバ福山藩ニテ有名ナル學者ノ墓所アリヤヲ問ヒシニ吉澤某ノ墓アリト云フ此吉澤ハ彼ノ藩ニテ隨分有名ナル漢學者ナリト云ヘリ然レドモ此人ノ號ガ移山ナリシヤ否ハ未ダ詳ナラザリシナリ以上記スル處ノ如クナレバ此書了阿ノ著述ニ非ルハ明ナレドモ誰人ナルヤニ至リテハ未ダ詳ニスルコト能ハズ且假リニ了阿トスルトキハ其似合ハザル所アリ即假名達モ少カラザルノミナラズ文字ノ誤モアリ又引書ノ謬モアリ類從ナ類聚ニ吾吟ヲ吟今然レドモ年代ハ天保マデヲ記シ種彥或ハ美成若クハ掖齋等ノ語ヲ引ク所モアリ何レノ部ニカ了阿云々ト記シアリシ所モア

レバ、此書ハ初メ太田全齋其他移山ナド云人ノ編シタルモノガ了阿ノ手ニ入リ了阿モ亦少シク遺ヲ拾ヒタルモノニハアラザルカ記シテ以テ他日ノ致ヲ待ツ

とこの斷定げにもと思はるれば今これを加へ置きつるなり

なほ著述につきていふべきものあり其は韓非子翼毳と漢吳音圖との事なりとす韓非子翼毳は已に世人も知れる如く全齋が自ら活字を製し僅に十五部を印刷して世に出せる者なればこの書今悉く世に存すともこの少數のものに過ぎず予の知れる所にてはこの書の全部完備して存するものは本郷區西片町舊福山藩主阿部伯爵家に白川樂翁侯の藏本なりしものゝあると故文學博士島田重禮氏の藏書中にあるものとの二部のみ東京大學圖書館に所藏せらるゝものは刊本なれど缺本なり他に完備せるものを有する人往々あれど其は皆寫本にて刊本にはあらざるなり又この書印刷に用ゐたる活字は今何處に保存せらるゝかまた如何になりに行きたるか少しも明かならずかく刊行の部數極めて少く且著者の刻苦して作り上げたる書なれば今に至るまで世上一珍書として重んぜらるゝは固より當然の事なり

(九〇一)

說

論

漢吳音圖に就いていふべきはこの書前版と後に改刻せし本とあり前版とは文化十二年五月に書成りて後出版せるものにて後の改刻本とは天保の末年に成りし

ものなりとぞ(黒川春村翁及白井寛蔭氏の説)この書世に出で、後韻鏡の事初めて明かになりたるものなれば後世字音の事をいふもの皆これに基く而して其の音徴廿六丁裏に數行埋木して黒くなしたるは後版なり前版には字句あり其の他なほ異同あり互に得失なき能はず白井寛蔭の著し、音韻假字用例附説下四十裏に

然て又太田翁の漢吳音圖は韻鏡の用例をこまやかに述られて無比の階梯と稱ふべき書なり然るに文化年中初めて梓に雕られたるをりの摺卷と天保以降ものせられたりと見ゆる摺卷とは副假字の異なる條々あり是れは後に心して改められたるものと見ゆれど猶却りて前本のかた是なりと見ゆる條もあり又實に後本のかたまされるも見えたり又たま／＼は前本後本共にいかにぞやおぼゆる條も見えたり

とあるを以てもこの事を知らるべし

さればこの書を讀まん人は後版は改刻なれば悉く可なり前版は誤謬の所ありと思ふべからず前版必ずしも不可ならず後版悉く正しからず見ん人この兩者を互に對照して繙讀すべきなり決して其の一方に偏すべきにあらず

予今爰にこの二書につきて特に叙述せる所以はこれ全齋の著述中最も注意すべきものなればなり其は古學小傳に「音韻ノ學ヲツトメ著ストコロ漢吳音圖アリ磨光韻鏡漢字三音考等ヲ摺撫シ別ニ發明スル所アリテ此書ヲ著ハセリ和漢々吳ノ

音ヲ檢査セル本邦イマダアラサルノ創見トスマタ韓非子翼贅(贅ノ字アリ)と見え又日本教育史料に「韓非子翼贅ヲ著ス世ニ行ナハル」とあるを以ても知らるべし

* * * * *

予この傳を草し終りて筆を擱くに臨み心に浮び出で、涙こぼるゝは漢學者としてしかも韻鏡學者として世人の決して忘るべからざるこの人の墓今は無縁となりて弔ふ者だになくその子孫今尙存生せるにもかゝはらずかやうに哀れなる様となり果てたることなり加之その一家の人々の墓碑ある土地も市區改正の爲めに取拂はれんとす由來名家の後祀絶えて其の墓碑も世に顧みられず打すてられ一遍の手向をすらせられぬもの世上其の例多かるがこれもまたその一つなるべし實に悲歎の極ならずや我東都には已に掃苔會といふものありて數年來同志の人々相會し故人名家の墓碑を弔ふありと聞くあはれこの會に名を列ねたる文士雅客は言ふに及ばず其の他世の篤志の人々よ予は切に望む諸士が予の微志を察して若し閑あらば杖を芝公園地威徳院の墓所に曳きこの學者の魂を弔はれんことをこれ一は故人に對する禮にして一はまた後進の學者文人の務ならずや

(明治三十八年一月廿二日稿)

論

說

太田全齋傳補遺

文學士 龜 田 次 郎

予曩に太田全齋傳を草して本誌に掲げたりしがその後他の知人より聞きえたるものまたは予が諸書に散見せるものより調べ出でたるものにてこの人の傳記に關し必要なるものいと多ければ今これを集録して前稿の補遺となす

* * * * *

太田全齋傳補遺

○東條義門が文政七年に江戸に上りたるとき太田全齋と面談せし事はすでに前稿に於て男信の跋文を抄出してこれを述べたりき然るに従來義門は全齋と未だ一面識もあらざりしを以て當時此兩人の面會については岡本保孝翁が紹介の勞をとりて義門をば全齋にあはせたるなり又義門が男信を刊行する前にその稿本を保孝翁に見せ己が説の是非をき質してそれに訂正を加へたる所もいと多く存し又保孝翁の説を採り用ゐて加へたる所も甚だ多くありとぞこは保孝翁が語られし事なりとて木村博士のまたひき現に男信の跋文にも

此書は凡そ三十年餘り前に高倉學寮にて近頃は香樹院嗣講と聞ゆる徳龍師の眞宗假名聖敎の校合の事に從ひをられし程に七寶の七集記の集の如き惣て連聲の時の口呼はいと分ち難けれど其字音のかなを物すとてチツフ互に濫すべからぬより見れば信心の類ひの混へ相ふまじきも必其所以あらんと思へる心より問起して聊聞置る事を本にて何くれと考へ文化の五とせにか先一わたり脱稿せし本をば(中略)又江戸に岡本縫殿助と聞ゆる文人のやごとなき際なる保孝ぬし等よりわが云さまの聞えにくき或は考證の足はぬ又はあと先にしてよき省きてよきなどすべてよからぬ處々をといひかへぬかく改めよと様々まめやかに評め遣せられけるはとり／＼に忝きいさめどもにし有ければ從ひて刪りもし補ひもして復かくものしたるは天保六年六月廿二日(下略)

とあれば明かなる事實なり

○全齋と保孝とは大に其交り篤く常に互に相往來せしことは前稿に於てすでにこれをいへり音韻學の事は固より全齋の方師なれどもこの他の學問に至りては全齋よりも却りて保孝の方師なりといふこの故に音韻學の所説を除きたる全齋の學説は保孝に負ふ所極めて多く屢訪ね來りて保孝に教をうけたることいと多かりきとぞこれもまた同博士の談話なり

○前稿に於て予は全齋と黒川春村との間に關係ありしならんと思はるるよし疑を存しながらこれを述べおきたるが今木村博士より聞きえたる所によればこの兩人の間には全く其交際往來の事なかりし由なり今爰に記して前稿の誤謬を訂正しておくなり

○全齋は當時神童として世に喧傳せられたる小川泰山と至りて親交ありしを見る其は東京帝國大學圖書館所藏の泰山遺説(刊本)を讀むに本書の序に於て

(前略)吾友誠甫(泰山)妙年善讀古文好解諸子能分魚魯克辨亥豕參考微驗皆有據援天明乙巳(五)不幸斯沒矣誠可嗟而痛哉惜乎吾見其進也未見其止也今讀其遺説爲之泣然嚮誠甫與塾生讀韓子有度篇至群臣廢法而行私重輕公法矣而曰行私重當爲重私行塾生皆以不然質諸余々以管子明法篇驗之果如誠甫言皆莫不感服探願索隱研究探討至乎盤魁錯節未嘗不驕然剖判嘗曰古文當讀以氣不當讀以目又嘗

曰、子好與有用、人交、不好與無用人交、性質直率、略不與人驢、故始或以爲癡、又不好詩賦、然亦善書、塾生以比顧氏三絕、是兩森宗真所作傳中所遺、因書以爲序云
天_年明_八戊_八申_八九月既望

福山 太田方 撰

太田 叔

武藏 井敬義 書

敬義 字 伯直

とあるも又全齋が其著韓非子翼毳第十二外諸説左下第三十篇に於て泰山の論語三歸説を引用して詳述せる條の末尾に

藤吉_{通稱}泰山_{通稱}妙年爲此説、少_少余_余十年、天_年明_五乙_五巳_五卒_卒時_時年_年十七、余深愛惜、故載之、亦不

厭長説也、晏子致車之致、受字之誤、受篆或致篆、各似故誤耳、是亦藤吉之説也

とあるとより察すれば泰山との交情も頗る密なりしなるべし、また前の泰山遺説序によりて考ふるに全齋は泰山よりも年長者にして師且友なりしことも推知せらるゝなり、序ながら爰にいふべきは後の韓非子翼毳の文よりして全齋の生年及びその享年を明かに知らるゝ事なり、其は文中に

藤吉妙年爲此説、少_少余_余十年、天_年明_五乙_五巳_五卒_卒時_時年_年十七

とあればこれによりてこの泰山は其享年十七歳にて天_年明_五五年_五(一七八五年)に歿し

論

當時全齋は泰山よりも十歳の長にて二十七歳なりしこと知らる然れば今この時より前稿にいへりし全齋の歿年文政十二年(一八二九年)までを通算するときは彼は七十一歳にて世を去りたるを知る、これによりて予が前稿に於て記したる彼が享年の推測の當れるを見るなり、またこれを逆算して彼が生年の寶曆九年己卯(一七五九年)なることをも知り得るなり

全齋の字が叔龜なることは_{慶長以來}諸家著述目錄によりてこれを前稿に記したりしが、今前に掲げたる泰山遺説の序文にある彼が捺印にも「叔龜」とあれば其の事益確實となれり

○次に全齋はまた近藤守重とも交を結びたるを知る、其は泰山遺説目錄の末にある附説によりて見ることを得るなり、其文に曰はく

右此一巻者、小川泰山之遺説、而當時舊友所集錄之書也、(中略)雖然泰山嘗謂、太田方與予爲讀古書三友、泰山所志、予能默識之、庶幾當不相徑庭乎、不幸早死、不得與聞大道之要焉、今也其弟直好、欲梓其書而傳之舊友、予讀之、爲泣然泣下、更復校正而定着之(下略)

天_年明_八戊_八申_八夏五月五日

舊友 近藤守重 識

とこの文中に見えたる「雖然泰山嘗謂太田方與予爲讀古書三友」の句以て證とすべきにあらずや、然れども人或はいはんこれ泰山の言なり、守重と泰山とは關係あるこ

太田全齋傳補遺

と明かならんも守重と全齋との關係如何は未だ俄にこれを斷定すること能はずと予はこれにつきて答へん其の説一理あるに似たりといへども尙盡くさざる論なり泰山と全齋とは前にも述べたるが如く親交ありし人なり然らばこの泰山と同じく交を結べる全齋守重の兩人が屢この泰山の家に相會したることもあるべくまた同じ經子の學を研究せし者なれば互に其説を語り合ひたることもあるべしこの故に同じく泰山と深交ある此の兩人のまた互に相往來し交誼を結びたるは明かなるべし況んや泰山が爲讀古書三友の語を出せるに於てをや

○全齋の逸事といふべき當時の學者間に起れる鬧着事件を仲裁せし事あり今その顛末を左に記さん

哲學雜誌第七卷第六十四號明治二十五年六月十七日發行に掲載せる故文學博士島田重禮氏の韓非子解題の條に

本邦人の注は物徂徠の讀韓非子を最古とす其說簡略備はらざれども大義を闡發せし所多し次に蒲坂圓の増讀韓非子崎允明の補訂あり増讀は徂徠の遺を補ひ誤を正し頗る初學に益あり然るに加賀の津田鳳卿なる者韓非子解詁を著し蒲坂の説を剽竊して己の説となせり圓之を見て大に怒り直に加州邸に至り速に己の説を删除せんことを求む反覆辨論堅く乞ふて已まず加藩にて大に持て餘し太田錦城及太田全齋の二人に托して之を慰解せしむ久しふして事漸く終

じ足に於て區別は假に津田の爲めに消滅せられたり別に書を作し以て洗滌すべしと更に舊説を補ひ新得を増し韓非子纂聞を著はす人皆其志氣の壯なるを稱すと云ふ(五六頁五七頁)

とあるを以て知るべし然るに予帝國圖書館所藏の蒲坂圓の韓非子纂聞(寫本)を閲するに著者が自跋に本書著述の由來を述べて曰はく

定本韓子纂聞二十卷序目附錄一卷凡廿一卷爲小林君子駿而述始乎五月之吉卒乎十月之望茲歲己巳(文化六年)之夏子駿邀讀韓子月六次以爲期其所問難出人意料而其開悟之敏若愚亦足以發也其意每憾拙著增讀之書略於解說母乃大簡乎爲之操筆更纂所聞以作此舉學既不博聞亦不廣此編豈足使子駿無憾乎假使子駿之材之美因之發明探頤闡幽而無憾乎又豈足使後之人無憾乎(中略)增予所纂廣予所聞能使後之人果無遺憾乎此書乎此予所以親書贈之且有望乎子駿也

己巳(文化六年)之冬

江都 蒲坂 圓謹識

説

と一も島田博士の所説の如きことあるなし如何にや然しながら一代の碩學鴻儒たる博士がかく説述せられたるは必他に依據あるならんも予の淺學不才これを知るに由なきは遺憾の極なり只姑く爰に博士の高説を擧げおくなり

今博士の説述せられたる所より考ふるに全齋と蒲坂圓とは或は交際ありしやも計られずかの仲裁事件の無事に落着せしは兩人の間親善なりし爲めに非ざるか

加之全齋も圓も共に韓非子に關する著述ありて全齋の著韓非子翼毳の中には「蒲坂氏曰」して屢其の説の引用せられしもの見え又圓の著韓非子纂聞の中には「太田方氏翼毳曰」或は「翼」として多く全齋の説を引用せし所あればこの兩人の間に或は交誼の存せしやも亦た未だ知るべからざる也

また全齋は共にこの事件に和解の勞をとりし太田錦城と交を結びたるにやと思はる津田鳳卿は加賀の人なり錦城もまた同じく加賀の人なり同郷の人なれば仲裁をも依頼せられしならんも又一方より考ふるにこの錦城は山本北山の門にありし事あり其の故にや同門なる小川泰山の泰山遺説を文化年中に再刻して書の表題を經史遺説と改め己が序文を加へて泰山の傳記をさへ述べて刊行せし人なり而して前にも述べたる如く全齋はこの書の序を書きまたこの書の著者とは深交ありたる者なれば従うてその同門の錦城とも交際ありしならんか況んや兩人共に難件を和解せしめしに於てをや

○前稿に於て全齋の著述の中韓非子翼毳は刻苦慘憺して作成したるものにて其刊行部數も僅かに二十部に過ぎず世に一珍書として重んぜらるゝことをいへり予帝國圖書館所藏本(寫本)を繙讀したるに其跋文に於て當時の狀況躍如たるを見る今繁を厭はず其全文を下に掲げん

韓非子翼毳跋

余爲韓子解研精十餘年矣未脫稿也難者城北集鴨之衝直突之災咫尺藩邸私年精力殆將焉有焉今茲購得活版刷二十部未定之述宜緘篋笥特懼一曙離干池魚而無副本修舊業也因刷以自備豈公諸世哉昔者朱晦菴爲四書集註晚尙改誠意章程伊川作易傳以爲終身未完今以謏劣之資修先秦之文蓋棺猶且不定夫多見聞而擇善者大聖之則也余寡聞少見而未及擇善牴牾重複前後祖仍姑寓諸再訂焉差解說不爲翼反爲讀者羈絆矣

亨和元年書于江戸藩邸私館福山太田方題

是活版佐坦藏所使玉河某氏造也辛酉_(元亨)之冬得之時水子二萬餘木子不良參差凹凸五日乃一張徒費工力更屬工人悉整之且刊造不足通共三萬餘然乃將就刷印焉會室人嬰疾痼越後年病瘳作又感時瘟難暮之春右指腫痛百方無効痛惱益篤軀羸氣憊五兒幼妙抱持不給季女絕乳通昔_(カタ)呱啼懷抱對立謳吟俟旦中饋空歇補綴有闕臧獲適去井臼之人不能操事蓋兩年艱阨已極斯業殆汨沒焉於時有姪鹽田屯投財資工料大兒名周歲甫十三執劊劊周旋於斯室人亦遇愈乃復踐前蹤然公私紉縻鮮有暇日闔家亦厭斯業矣按武英殿聚珍版式云木子二十五萬史臣稱隆盛夫以單_(分)陋困劣之子父而擬於大邦之右文不知量亦已甚矣雖然半塗廢業亦所憾焉往苒歲月往矣仲叔漸長皆服父業兄弟三人進勉從事翁蚤起兒晏寢今茲戊辰_(文化)孟夏乃得卒業矣唯病宋字不巧兒刀頑鈍體緣糊塗極知不良

雖實醜於精越鵬冠之工、竊慕乎愚公運石之誠、大雅君子、若有取於此、而恕其拙陋、幸賴亦甚矣、

(三八)

太田 方 撰

男 周 彫

男 信助 彫

男 三平 刷

これなり嗚呼何たる悲哀ぞや何たる苦心ぞや享和元年辛酉(一八〇一年)の冬活字をえてより文化五年戊辰(一八〇八年)の孟夏に全く刊行の業を卒ふるまで八年の年月を経たり其の間の苦心想ふべしこの書は跋の首に「余爲韓子解研精十餘年」とあると享和元年の題あるとによりて考ふるに彼が三十歳前後より初めて四十三歳の時に至りて成りしが如しさればその刊行は五十の折なり又其印刷に用ゐたりし活字は佐藤一齋のものを骨子としこれが刊刷には父子三人従事したることを知るなり又當時一家の悲連は業を半にして廢せんとするに至り漸く姪鹽田氏の投資によりて完成せりこの時の状況今より想ふも實に涙こぼるゝ事ならずや且この書刊行部數僅かに二十部たることもこの跋文に依て知らる宜なりこの書の世に尊重せらるゝことやこの跋文は眞に全齋傳についての一大資料なりと云ふべし故島田博士もまた前掲韓非子解題の條に於て

同時に太田全齋あり名は方福山の儒臣にて韻學に達く漢吳音圖の著あり尤も力を韓非子に用ゐ沈潜刻苦十餘年翼叢十一卷(○本)を著はす諸説を參考して頗る發明する所あり然れとも家餘費なきを以て上木すること能はず僅に二十部を活刷せし故傳本甚少し希れに抄本にて通行せり(中略)余が見る所を以てすれば翼叢纂聞校註の三書を以て翹楚と稱すべきなり

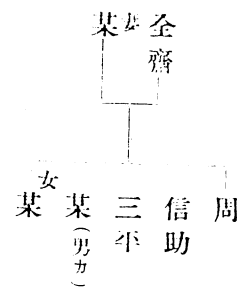
論

と説かれたり以て本書が實に珍書として重んずべきのみならず其所説に於ても完備したるものなれば大に尊ぶべきものなることを知るべし

説

前稿に掲げたりし著述目錄には別に重訂韓非子翼叢二十六卷といふものあることをいへりこは予が東條琴臺の近代名家著述目錄續編に見えたるに依りて記したるなりこの重訂本といふは如何なるものなるか明かならず活刷せるものは二十卷なればこは後に全齋が新に作りしものならんか其全く活字本のものとは異なるものなるべし

○予前稿に於て林松院の過去帳により全齋一家の系統を作りたりしが今前掲の韓非子翼叢の跋文によれば當時の全齋一家の家族の事を知るに足るなり即ち



あり而して前稿系統に示せる天明八年に死にたる男子をこれに加ふるときは全齋には少くとも六人の子女ありしこと明かなり而してこの男子は前稿に示したる藤七郎以下の者なるや否やはこれを知ること能はずといへども若し假りにこれらの人々なりとせばその一人のみは歿年より逆算して享年をも推測することを得べし何となれば跋文の中に業を起してより二年の折大兒の周歳甫めて十三と見えたりこれによりて推知せらるゝなりとす

○岡本保孝翁の木村博士に物語り玉ひしものなりとて同博士が子に語られたる事あり今そを下に記さん

全齋には一人の女ありしがこの女また其父と同じく漢學に造詣至りて深かりしとぞされど惜しいかな其名を逸せりこの女に連關して全齋翁の逸事あり全齋翁は病に罹ることあるも決して藥を服用せざりし人なり其は何故なるかといふに漢書に「良醫は疾を癒し中醫は藥を飲むも飲まざるも可なり庸醫は人を殺す」とい

論

ふ語あるによりてなりとこゝを以て翁常に人に語りていふやう今の世に良醫といふものあることなし如何に良醫と稱へらるゝ者にても必中醫に過ぎざるべし中醫ならば漢書に見えたる如くに藥を飲むも飲まざるも可なれば飲まずともよしと然るに一朝翁疾革まりたるに及びこの女大に患ひ醫師小島某(春庵か)と私かに談じて曰はく今や父病み玉ひて其容態危篤に見ゆ如かず藥を服せしめて全癒せしめんにはと幸に父は病重りたればその氣力大に衰へ玉へり其平常嗜み玉へる茶湯の如くにしなしてこれをすゝめんと兩人相計りて藥をすゝめたりしが翁は快くこれを服したりしとぞ然れど天命は如何にともするに由なくこれより後二三日を経て翁は遂に世を去りぬ後日に至りてこの女大に歎じていふやう妾事を解してよりこのかた父の意に背きたる事あるなし今その歿前に及びて其意に背き藥をすゝめたりこの不孝の罪はかへすゝも憾みとすとして悲み悔いたりとぞ予思ふにこの女の言また一理あるに似たりといへどもその歿前に藥をすゝめたること父子の情としては必しも吝むべきにあらず寧ろ孝養の至情より出でたるものなりといふべしまたこの女といふは前載韓非子翼蠹の跋文に見えたる當時の季女のことによあらんか

說

○全齋の著述の世に知れ渡れるものは前稿に記せるに過ぎずといへどもこの外尙至りて多くの著書ありたるなり然れど之は何れも皆未定稿にて今は逸して傳

はらず惜むべき事なり其今世に傳はれるものはこの中の一小部分に止まるとぞ
これも木村博士の談話なり

○前稿に述べたる著述の中に古今診叢三十二卷ありまたこの書が俚言集覽の根
元にやあらんかと中根肅治氏の説を引用していへり然れど予は未だこれを見た
ることなくまた今世に存するものなるや否やを知らずといへども新村出氏の談
話によれば清水濱臣の著皇朝噺林一卷(寫本)の中にこの書の説を引用せる所一二
箇所ありとぞ

○數年前書肆琳瑯閣に全齋翁の藏書たりし音韻學書五部ありて桐材にて作りた
る書函に入れ其表に音學五書と題字せるものありしが此の書今は學習院圖書館
の所藏となれり五書とはいへども、五音集韻金の韓道昭の撰十五卷(經史正音切韻
指南)元の劉鑑が撰一卷(篇韻貫珠)一卷(類聚四聲篇十五卷)の四部あるのみなり

○全齋翁の著述と思はるゝ寫本の類往々藏書家の手に入ることもあり現に松井簡
治氏の藏書中にも辭書體にして缺本のものありといふ

○漢吳音圖の版本は曾て下谷の某書肆の所藏となれりしが彰義隊の戦争の時兵
燹にかゝりきといふ惜むべし

(明治三十八年二月二十日稿)

前稿所載太田全齋傳中正誤

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
二	五	あらば	あれば	八	一〇	藤七郎の妻某ノ上にある線は折	威徳院
同上	一七	諒とせられ	諒せよ	一〇	三	成徳院	威徳院
四	七	松林院	林松院	一二	一四	事は太田方	事に精しきは太田方
四	一七	介名	成名	同上	一五	あり	なり
五	四	過去張	過去帳	一三	一五	各詳粗	各精粗
同上	一二	過去張	過去帳	一四	一三	古人診叢	古今診叢
同上	一三	其は	其の	同上	一五	全重讀例	全齋讀例
六	五	同年(二八三の誤か)	同年二月(二八三の誤か)	一七	一六	十五部	二十部
同上	一〇	嘉永成年	嘉永三成年	同上	一〇	東京大學圖書館	帝國圖書館
七	八	寶永西二月廿四日	寶永二西二月廿五日	同上	同上	刊本なれど	寫本にして
同上	一二	智照院惠一妙大姉	智照院惠一妙光大姉				